デザインスクール in 沖縄 実施報告書

2016 年 1 月 4 日
十河

1. 概要

昨年に続き、3 回目となるデザインスクール in 沖縄を開催した。本スクールの対象は主に 1 年次の履修者であり、ファシリテーションの習得を一つの目的としている。第 1 回、第 2 回のテーマは観光、就職など若干抽象的な側面もあったが、今回は会場を琉球大学千原キャンパス（沖縄県西原町）から沖縄市中心部の商店街に移し、より具体的なテーマとして沖縄市の抱える実問題に挑戦した。スクールの実施にあたっては、琉球大学、（株）がちゆん、沖縄市、（公財）沖縄こどもの国 などの協力を得た。

参加者がワークショップにおいてより効果的なファシリテーションを実践できるよう、事前に実施するファシリテーション講習の時間を昨年より拡大し、内容を充実させた。また、学習効果を高めることを狙い、スクール終了後に参加者自身による振り返りを行った。英語のみで実施するチームを設けたことも今回初めての試みであった。

2. スケジュール

事前に京都にて半日のファシリテーション講習を実施し、ファシリテーションの基礎を習得した。沖縄には 5 日間滞在し、合同デザインスクール（3 日間）を実施した。主なスケジュールは次のとおりである。

日程	概要
11 月 7 日（土）午後	ファシリテーション講習（十河、中川） （於　京都大学デザインイノベーション拠点）
11 月 20 日（金）	午前、伊丹空港から那覇空港へ 午後、那覇空港からホテル（北谷町）へ移動 オリエンテーション（十河、石田） ワークショッププログラムのレビュー（十河、平本）
11 月 21 日（土）～ 11 月 23 日（月・祝）	京都大学－琉球大学合同デザインスクール（於　沖縄市）
11 月 24 日（火）	フィールドワーク（那覇市、沖縄市周辺） ワークショップの振り返り（十河、平本）（於　那覇空港） 夕刻 那覇空港から伊丹空港へ。帰京

3. プログラム

3.1 ファシリテーション講習（京大のみ）

11 月 7 日（土）13:30～16:30（於 京都大学デザインイノベーション拠点）

概要：合同デザインスクールの 2 週間前に、デザインプロセスとデザイン手法、ファシリテーション、インタビューについて基礎的な講習を実施した。昨年のスクールでもファシリテーションについて講習を行ったが、チームをうまくファシリテートできなかった参加者がみられたため、今回は昨年の講習内容に対してデザイン手法とインタビューの各講習を新たに追加し、約半日の講習とした。講習には英語話者の留学生 2 名を含む計 10 名が参加した。

（1）講義「デザインとは」（十河）
問題発見と問題解決のための基本的なデザインプロセス（発散・収束）、ブレインストーミング、強制発想、親和図法などの基本的なデザイン手法について講義と演習を行った。

（2）講義「ファシリテーションとは」（中川）
ファシリテーターの心構え、および、傾聴、質問の仕方などファシリテーションの基礎的な手法やツールについて講義を行った。

講義の様子

（3）ファシリテーション演習（中川）
ファシリテーションの基礎スキルであるコミュニケーションの技術について、ミラーリング、アクティブ・リスニング（積極的傾聴）などを通じて体験的に学習した。

演習の様子

（4）講義「インタビューについて」（中川）
半構造化インタビューの概要と手順、質問の仕方など、インタビューの基礎について講義を行った。

（5）テーマの説明（十河）
今回の合同デザインスクールのテーマ（後述）について簡単な説明を行い、当日の自チームのワークショップのプログラムをデザインすることを、当日までの課題とした。

3.2 オリエンテーション（京大のみ）

11 月 20 日（金）14:30～16:30　（於 宿泊先のホテル）

オリエンテーションの様子

概要：翌日からの合同スクールに備えてオリエンテーションを実施した。講義「沖縄を理解する」（十河）では、各種の統計データなどに基づき沖縄の現状を理解した。講義「超ファシリテーション」（石田）では、ファシリテーションの 1 つのスタイルとして、Extreme Facilitation が紹介された。最後に、2 週間前のファシリテーション講習で課題とした当日のプログラムについて、参加者で互いにレビューしブラッシュアップした。

3.3 京大－琉大合同デザインスクール

11 月 22 日（土）～24 日（月・祝）（於　沖縄市）

概要：沖縄市では、特に中心市街地において商店街の空き店舗が増加し、高齢化も進行しており、その活性化が課題となっている。本スクールでは、こうした沖縄市の現状と課題、さらに「コザ」と呼ばれるこの地域の独自の文化を理解し、商店街、図書館、こどもの国（動物園）を対象として、地域の活性化のための解決策をデザインした。

参加者は後述の 2 つのテーマに分かれ、5～6 名で 1 チーム、全体では各テーマ 3 チームずつ、計 6 チームを構成した。デザイン学履修者はファシリテータとして各チームの議論をリードした。今回は英語話者の留学生 3 名が参加しており、琉球大学の日本人学生 2 名と、京大の教職員 2 名で英語チームを構成した。グループワークは沖縄市中心部の商店街に位置する商業施設「コリンザ」にて実施した。最終発表会は一般公開され、本スクールの参加者に加え、沖縄市職員や地元の商店街などから 10 名程度の聴講者も迎えて開催した。

グループワークの様子

フィールドワークの様子

発表会の様子

【テーマ A】こどもの国の活性化

本テーマは文字通り沖縄こどもの国の活性化を実現するためのデザインを立案することが趣旨である。具体的には、次の 2 つをテーマに解決策をデザインする。

①観光客向けのプログラム提案

②外国人への PR 方法

沖縄こどもの国では、全国でも珍しいゾウの赤ちゃんの園内出産を初めとして、ワンダーミュージアムの全面改装等、積極的に政策を打ち出しているが、より一層の活性化に向けたアイデアのデザインが望まれる。実現性のある具体案が出れば沖縄市の構想案に盛り込まれる可能性もある。

【テーマ B】図書館と商店街の連携を通した活性化

本テーマが対象とする商店街とはコザ一番街近辺である。「沖縄市の通称“シャッター通り”ことコザ一番街」と言われるほど閑散とした雰囲気が漂っているが、「閑散としているのは日中で、夜は飲屋街として賑わっている」「飲食以外は苦しい面があるが、一部にはネット通販等で頑張っている」「新規参入が少ない（流動性が低い）」など、時間帯・業種毎に傾向が異なると思われる。他方、沖縄市では「情報社会、生涯学習社会、少子高齢社会、知識創造社会、国際社会といった現代社会の変化に対応できる図書館」を立案中である。そこで、本テーマでは「図書館と商店街の連携を通した活性化」を達成するためのデザインの立案を目指す。

スケジュール：

11/21（土）（1 日目）	
9:00－ 9:30	受付
9:30－ 9:40	オープニング
9:40－10:35	基調講演「沖縄市中心市街地活性化の取り組み」 上里幸俊氏（沖縄市役所経済文化部 部長）
10:40－11:50	基調講演「こどもの国の課題」 高田勝氏（公益財団法人こどもの国 施設長）
11:50－13:00	昼食
13:00－18:00	グループワーク
18:00－21:00	交流会
11/22（日）（2 日目）	
9:00－18:00 (15:00－16:00)	フィールドワーク、および会場にてグループワーク （グループ個別中間面談）
11/23（月・祝）（3 日目）	
9:00－12:00	グループワーク（プレゼン準備）
12:00－13:00	昼食
13:00－14:30	グループワーク（プレゼン準備）
14:50－16:50	発表会
17:00－17:10	講評、表彰式、クロージング
17:10－18:00	懇談会、反省会

発表タイトル：

【テーマ A】こどもの国の活性化

A-1：人づくり　環境づくり　沖縄の未来づくり

A-2：HEY! 外国人 ～こどもの国に外国人が来るまで～

A-3：あしびぬちゅらさー　にんじゅぬすなわい

【テーマ B】図書館と商店街の連携を通した活性化

B-1：マチごと図書館

B-2：負のサイクルをリサイクルへ

B-3（英語チーム）：Revitalization of Koza Area，コザを復活させるために！（優秀賞）

4. 参加者

【京都大学】

＜履修者＞ 9 名（内 8 名ファシリテーション講習参加者）

＜教職員＞ 6 名

教員 4 名（内 1 名ファシリテーション講習のみ)、職員 2 名

【琉球大学】

＜学生＞ 23 名

大学院理工学研究科情報工学専攻 1 名（M1）

工学部情報工学科 15 名（B3×4 名、B2×2 名、B1×9 名）

観光産業科学部産業経営学科 3 名（B4×1 名、B3×1 名、B2×1 名）

理学部海洋自然科学科 1 名（B2）

農学部亜熱帯地域農学科学部 1 名（B3）

法文学部法学科 1 名（B4）

（学部不明）1 名（B4）

＜教員他＞ 4 名

教員 3 名、職員 1 名

【その他】

社会人協力者 7 名（企業 3 名、公益法人 1 名、行政 3 名、）

5. 参加者の所感

本科生および教職員に次の内容について意見を求め、計 13 名から回答を得た。

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（学生は匿名、教職員は実名で Web で公開）
(2) 本スクールをファシリテーションの学習と実践という側面から見た意見（非公開）
(3) 今回のテーマについての意見（非公開）
（2013 年は「観光」「おもてなし」、2014 年は「健康」「雇用」）
(4) その他コメント（非公開）

（情報学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

The Design school in Okinawa was a very nice experience for me. First, the place is very beautiful, and we kind of disconnected from our everyday life, and were able to focus exclusively on our 'mission' (To find solutions to Okinawa-city). Every activity that we conducted, even when it was a casual dinner, was connecting in a way to the workshop as we were in a continuous observation mode, getting ideas and thoughts from everything we are doing. The experience of finding solution in Okinawa city was very fruitful. First we had to learn about Okinawa-city through some presentations and from the surveys we did. This allowed us to be able to have a broader look at the problem. In fact, we already kind of know about Okinawa as a touristic place, but this design school allowed us to have a more real perspective on the city and its problems. Moreover, collaborating with students from Okinawa was very useful as we had their point vue on the matter. Our objective was to find solutions to revitalize Koza area in Okinawa-city. We proposed the idea of turning it into an artist city by giving scholarships to young artists, organizing graffiti event, giving lower rents to craft makers and artists, etc. We came to this idea after brainstorming problems and ideas, surveying people, and walking around the city while noticing its strengths and weaknesses. After that, we summarized what does Koza area actually possess (shutter doors, small streets, library, etc.), and what it doesn't possess (best beaches, transportation, best shopping option, etc.). This gave us a clear idea about the current situation and allowed us to design our solution.

（工学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

ファシリテーションについて事前に講習があり，頭では理解したつもりではあった．しか

し，事前情報がほとんどなかったこともあり，期間中あまるうまくまとめることができなかったと感じた．特に難しかったのは，自分も参加者として参加しつつ，ファシリテータとしての役割を果たさなければならないという点にあったと感じる．自分自身も案を出しつつ，話が一方向に偏らないように舵取りをする点がある意味矛盾した要求で難しいと感じた．また，議論が煮詰まってしまったときに方向転換を行うことの難しさを特に感じた．グループの方々が積極的に参加してくださったおかげで，３日間のなかでなんとか話をまとめられたのではないかと思う．異なる文化圏の人々と共に取り組むという目的もあったそうだが，グループの琉球大学の学生たちが沖縄県外出身者ばかりだったこともあってか，グループ内ではあまりそのような差を意識する機会はなかったように感じた．

（経営管理大学院 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

担当テーマのプロポーザーであるこどもの国（Zoo&Museum）施設長は、リーダーシップを持った大変なアイデアマンだった。最初のテーマ説明で、施設がこれまでいかに工夫してきて、今後もどんな新しい取組みをしようとしているかを中心に話されており、あまり困っている感じがなく、テーマに取り組む必要性を強くは感じられなかった。

すぐフィールドワークに出て実際に確かめたが、施設単体では非常に工夫を凝らして地域住民の憩いと学びの場を提供できており、テーマが困り事に直結していないという当初の違和感が確信に変わった。公的な色の強い施設として政治的な意図も多分に含まれているテーマ設定から離れて、課題をどう捉えなおすかという最初のポイントに直面し、我々はそもそもの施設のあり方を、自分達なりの目線で捉えなおすという方向性を確認して 1 日目が終了した。

2 日目は全体スケジュールで組まれていたフィールドワークをキャンセルし、1 日目の各活動で得たインサイトを踏まえて、「こどもの国を世界一にするには」というテーマでのブレーンストーミング、親和図法、インサイトを組み合わせたアイデア強制発想、経営理念からインサイトをプロットするバリューグラフ作成を実施。

3 日目、筋の良さそうなアイデアを３つに絞ると共に、バリューグラフを抽象化して、アイデアをプロットし、提案の発表を迎える。ここで、肝心のプロポーザーがいない中での発表となったことは大変残念だったが、内容としてはまずまずのものができたと感じた。

最後の振り返りでファシリテート経験者である参加者から、特に 2 日目のワークについてファシリテーター主導になっていた点の指摘を受けた。ワークショップやファシリテーターの経験者と未経験者が混在した場合のスムーズな進め方については、課題として残ったと感じている。

（経営管理大学院 修士１年）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

本イベントは訪沖２週間前のファシリテーション講習から始まった。今年は予科生の参加も多く、これがなければ当日初対面となるメンバーも複数いたので、ミーティングとしても有効だった。

沖縄は夏空でじっとしていても汗ばむほどの陽気であった。

ワークショップ初日は社会人協力者による基調講演からスタートしたが、テーマが実課題なだけに詳細かつ切実な情報が得られた一方、翌日の現地ガイドも含め、こちらの予想を遙かに上回る様々なアイデアを考案し実行されていたことが判ったので、ハードルを上げられた気もした。

わがチームは学部１～３年生と自身からなる５人体制であったが、遅れて参加する１人の合流時刻が不明で琉大生の間でも面識が無かったため無碍に進める訳にもいかず、エアメンバーを交えてのチームビルディングという若干苦しいスタートとなった。しかし、沖縄人の気質なのか若者気質なのか陽気で素直なメンバーに救われながら爬竜船は進んだ。

ファシリテーションは「自由な発想の歓迎」「傾聴」「時間配分」を意識して臨んだが、未着メンバーが加わる前にアイデアを進行させてしまうのは良くないと判断したため、発想の拡がりを期待しメンバーの意見を敷衍していった結果、初日はこちらが一方的に喋っている状態となってしまった。これは自身とメンバーとの年齢差も大いに関係していると思われるが、経験が邪魔をするというメタ認知ができたことは収穫であった。

翌日以降はそれぞれが能動的に躍動しはじめ、スキットを交えたプレゼンテーションにもノリノリで様々なアイデアが取り入れられ、３日目にはこちらがスケジュールと若干のオーダーを提示した以外は、各自が驚くほどの速さで自律的に準備を進めることができた。

チーム発表の結果、受賞できなかったことは残念だったが、リフレクションにおいて来年もまた参加したいという声が寄せられたことは嬉しかった。

アフターは、琉大の参加者は殆どが未成年や自動車で来場していたため若干淡泊な感はあったものの、様々な琉大生や先生方と懇談でき楽しいひと時であった。

この機会を与えてくださった両校ならびに協力者各位には改めて感謝する次第である。最後に、京都と約 20℃の気温差の中、誰ひとり体調を崩すことなく全日程を終えられて良かった。帰洛した翌日、私は寒さのあまり炬燵を出したが、皆さんはだいじょうぶだったかな？

（教育学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

沖縄に行くのも初めてであり、地理について全く知識がないにも関わらず、「図書館と商店街の連携を通した活性化」というテーマに取り組むこととなり、不安であった。しかし、

琉球大学の学生と共にテーマに取り組んだため、チームとしては自分の地理に関する知識不足が問題となることはなかった。さらに、琉球大学の学生と共に議論や実際に街に出てフィールドワークをすることで、活発なアイデアの創出を行うことができた。私のチームは、街でインタビュー調査を行ったが、普段はインタビュー調査を行う機会や勇気が持てないものだが、今回は活動の一環として能動的に調査を行うことができた。チームのメンバーも今回の活動に大変満足しており、そのことはファシリテーターとしても非常に喜ばしいと思う。参加者としても、普段体験できないようなことを行うことができ、満足している。

（情報学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

今回はファシリテーションの練習で沖縄に行ってきました。三日間の活動で一番重要だと感じたのは人と人の間の関係の調整でした。初めに会う違う人たちが集まってアイディアを出して、調整していくのは大変なものだと思います。人たちはだれでもいいアイディアを出せる可能性を持っていると思います。しかし、その環境を作ってあげるのが自分の役割だと思います。人たちが持っている能力を 100%発揮できるようにするのがファシリテーターとして重要だと感じました。また、アイディアを出す時にグループ中の人と人の間で衝突とかがあるかも知りません。その衝突をうまく解決するのがファシリテーターとしての重要な仕事だと思います。もし、自分の意見が出した意見が選択されなかったとしても、結果を受け取れるようにするのが重要だと思います。また、本に書いている内容と実際は違いました。本に書いている内容は理想的な方法ですが、人というのは理想的ではないので、人たちの性格等、内面的なことも顧慮して進行していく必要があると思います。

一番印象に残ったものとしては、グループ中の人たちが持っている能力でした。大学 1 回生と 2 回生のほうが多いでしたが、プレゼンテッションもうまいし、積極的し、いいアイディアも持っていました。私の大学 1 回生、2 回生の時に比べて皆すごかったので、その時を振り返して反省の機会にもなりました。

（情報学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

During the 5 days in Okinawa, I worked with my group on the topic of “The Facilitation of Main Shopping Street”. We not only visited real places, did survey with local people, but also did a lot of group discussion and worked for the final presentation as well. During this process, I learned a lot from my group members. I also gained a deeper understanding in how to work on a real problem, how to cooperate with other people in

different major, and in how to prepare for an impressive presentation.

In the end, I want to appreciate all staff and my group members greatly. Thank you for bring me a so nice memory and thank you for make me learn so much.

（教育学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

予科生であるため、今回のデザインスクールにはファシリテーターでなく参加者として参加しました。

このような、3 日間集中フィールドワークとワークショップに参加するのは初めてです。実際に現地の光景をみたり、地元の人々と話したり、それぞれ違うバックグラウンドの参加者達と討論したりして、最後、一つの案に仕上げる過程を体験できて、とても良い経験になりました。

同じチームのファシリテーターの行動をみて、勉強になったことは、まず、ファシリテーターは自分の意見を強く主張しないが、チーム目標を明確に認識し、参加者の討論が発散しすぎないように調整すべき。また、詰まったタイミングで適切なアドバイスを出すべき。最後、時間を管理すべき。

短時間のなかで、商店街活性化のような難問の解決策を考えるにはあまり時間が足りなかったと感じますが、とても有意義で充実した時間を過ごしました。

（情報学研究科 修士１年生）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

Attending the Design School in Okinawa was a good experience in applying the theories learnt into reality. It is a quite practical and challenging, yet rewarding activity. What really impressed me about the event is that a team with people from various background and cultures could achieve the goal with a good result. In fact, a good team is not a team with the same-minded members. Instead, it is a team consisting of people with variety of skills and background knowledge. Although the communication of idea with people from different background knowledge, skills, and cultures is one of most challenging things other than the difficulty of the topic itself, we managed to overcome the differences, and we finally could come up with a solution agreed by everyone in the team with a great satisfaction. I think it is the success of a teamwork because the processes in determining the solution mean more than the final product, so how we work cooperatively in a team to seek for a solution is what really teaches us as a good lesson. In addition, a good

facilitation of the discussion is quite crucial, especially when Japanese and international students from Cambodia, China, and Lebanon have different perspectives over a certain discussed matter. However, a facilitator in my team lessened the tension and eased the processes, which makes everyone happy with the outcome. Therefore, I think everyone has performed a good job in his or her roles a facilitator and participant.

石田 亨（情報学研究科 教授）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

初めて英語チームが生まれたので、そのサポートも兼ねて参加した。京大の学生 3 名は、レバノン、カンボジア、中国の出身で日本語は分からないの。琉球大学の学生 2 名は英語は得意だが、速いスピードでの討論は苦しい。英語が堪能な角川さんが頑張ってつないでいた。

言語の問題はあるものの、このチームの学生は意欲的で満足度も高かったのではないかと思う。賞が得られたのも、言語を超えたチームワークの結果だ。

個人的にも気づきが幾つかあった。

- シャッター街に積まれたゴミの前を通った時、お年のご婦人が、「外人さんに恥ずかしい。」と声をかけてくれた。一方、レバノン出身の留学生はベイルートを思い出し「故郷に帰ったみたい」と喜んでいた。
- 「なぜ中国人は爆買いしかしないのか。」と問われた中国出身の留学生が、「音楽が目的ならヨーロッパに行くよ。」と切り返した。

共に、ステレオタイプが壊れた瞬間だった。こうした気づきが新しいアイデアに繋がっていくのだと感じた。

十河 卓司（デザイン学ユニット 特定准教授）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

昨年、一昨年は那覇市内に宿泊し、琉球大学のキャンパスに通う形で開催していたが、今回、初めて琉球大学のキャンパスを離れ、沖縄市中心部の商店街で開催した。沖縄市が実際に抱えている課題をテーマとし、その解決策のデザインに挑戦するにあたり、問題が起きている現場の近くで開催するのがよいだろうという意図からである。

また、これまでは教員が各チームに加わり議論をサポートしていたが、今回は原則として学生のみでチームを編成し議論を行ったという点も新たな試みであった。そのため、私自身は各チームの議論の様子をじっくり観察することができたわけであるが、各チームとも総じて例年より順調に進行しているように思えた。特に、例年は発表前日の夕方に議論がまとまっておらず、発表をどうしようかと途方に暮れる姿が見られるのであるが、今回はどのチームも議論を早々に切り上げて会場を後にしていたのが印象に残った。内容を拡充して事

前に実施したファシリテーション講習の成果か、あるいはテーマが具体的で取り組みやすかったのか。

一方で、「困った状況を何とかする」という経験から学生に何かを学んでもらうには、もう少し「想定外」「途方に暮れる」ということがあってもよいかもしれないとも思った（過去2回のスクールでは、そういう要素がところどころにあった)。もしかするとテーマをはじめ、ワークショップを作り込みすぎているのかもしれない。次回以降の課題である。

本スクールの実施にあたっては、琉球大学の先生方、（株）がちゆん、沖縄市をはじめ関係者の皆さまに大変お世話になりました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

平本 毅（経営管理研究部附属経営研究センター 特定助教）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

数日の活動を両大学の学生と共に経験して強く感じたことは、沖縄と京都という大きく文化の異なる土地で暮らす学生同士が交流し、膝を突き合わせて議論を行うことは、間違いなく彼／彼女らに刺激と学びをもたらすということである。けっして万事が順調に進んだわけではないだろう。琉球大学の学生はワークショップへの参加経験が少ないし、京都大学の学生はファシリテーションの経験が足りない。それゆえ議論の中身とその進め方は、端から見ていて手放しで褒められるようなものではなかった。調査一つとっても、フィールドワークについていくと、学生はただ漫然と歩いていて、写真を撮らなければノートも用意していないこともあった。出先から戻って椅子に座ると、調査結果の整理も行わずいきなり感想を話し始めて、そこから連想したアイデアを出してワークを進めようとする班もあった。だがそれでも、物の見方考え方、知識や能力の様々に異なる二つの土地の学生たちが真剣に語り合い、一つ一つ課題を片付けて議論を進めていく様子は、疑いなく刺激的なものだった。その結晶として各班が作り出した最終成果物も、それなりによくできたものだったように思う。ただ一つ残念だったことは、三日間という時間の制約上仕方のないことではあるだろうが、きちんとワークショップの手順を踏もうとした班のほうが逆に不利になる傾向にあったように思うことである。土地の人々や観光客が何をどんな価値観をもって何をどのように感じているかをきちんと調べ、調査結果を整理しつつ体系的にアイデアを導き出し、そのアイデアが土地の人々の暮らしや社会にどんな影響を与えうるかを精査しながらデザインを行っていくようなプロセスを踏んだほうが、水準の高い成果物を提出できてよい評価を得られるような仕組みが作れれば、さらに充実したワークショップが行えるだろう。

角川 栄里（デザイン学ユニット 特定職員）

(1) ファシリテーション講習及び合同デザインスクールでの活動内容と所感（公開）

私のチームが取り組んだテーマは「図書館と商店街の連携を通した活性化」であったが、

シャッター商店街の問題は長年この地区で取り組まれているものの根本的な解決策がなかなか見出せていないものであり、実質 2 日間で情報収集と解決策の提案を行うのは難しいと感じた。

しかし、3 カ国別々の国出身の京大留学生、琉球大の学部 1 年生と院生、そして職員である自分という、世代も含め全く異なるバックグラウンドを持ったメンバーが集まったチームだからこそ、より広い視野から見た自由な発想による解決策を提案することができたのではないかと思う。

我々は英語でワークショップを行った唯一のチームであったため、琉球大の学生はコミュニケーションに苦労されたことと思うが、常に意欲的で前向きな態度で参加しておられたことに大変感動した。ただ、チームメンバー兼通訳として参加した自分の立場としては、日本人学生と留学生のコミュニケーションがより円滑に進むよう、準備段階や当日の情報伝達、通訳の仕方など、改善点が色々あったと思う。次回参加する機会があれば、それらを反映させていきたい。

最後に、琉球大の先生方や株式会社がちゆん様、講演者や発表時の講評者の方々など、関係者の皆様には大変お世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。